

プレス空知 新連載 2018年8月 深井尚子

今回から1年間、新しいテーマで連載させていただきます。すでに5年目になりますが、今回もどうぞよろしく願いいたします。テーマは、ピアニストの日常です。

私は現在、教育大岩見沢校で教鞭を取っていますが、ピアノ演奏家という意識は常に持って、演奏会を続けています。2015年は、ピアニストデビュー30周年を迎え、記念リサイタルを行いました。ピアニストは、定年がなく一生続けられる仕事ですが、今も毎日の練習が欠かせません。学生時代から演奏家として活動している時は、1日8時間くらい練習をしていました。よく、「ご家族の方はいつもいい音楽を何時間も聴けていいですね。」と言われるのですが、私の実家では、練習室の隣が父の書斎で、いつも練習が聴こえていた父は、「練習は過酷です。地獄のようです。」とっていました。つまり、完成した美しい演奏に至るまで、地道な繰り返し練習、曲とは無関係なリズム練習、音階や分散和音の練習がなければ、演奏会でよい演奏はできませんので、人が聴いてもつまらない練習の音の繰り返しがあって初めて、曲が完成します。その練習が日課になっているのが、ピアニストの日常と言っていいと思います。

私のウィーンでの恩師、ペーターマンデル先生が65歳で大学を退官される時、「もう、演奏はやめる。練習のために、読書も散歩も旅行も、したいことが何もできない人生だった。これからは、練習にとられていた時間を自分のために使いたい。」とおっしゃったことは衝撃的でした。当時まだ、若き音楽家の卵だった私たちは、その言葉をなんとなく理解はしましたが、何か釈然としない気持ちになったことを今でもはっきり思い出します。練習は私たちの義務で、舞台上で演奏することは、その練習を生涯続けていくという覚悟があるということです。芸術には終わりがなく、膨大なピアノ作品を演奏し続けることは、素晴らしい音楽を自分たちが再現して、その素晴らしさを聴衆に届けたいという思いがあるからで、その気持ちを一生持ち続けられる者だけが、演奏家として生涯活動できると思っています。だから、恩師の言葉は、釈然としないというより、「年齢を重ねると、練習が嫌になってしまうのか・・・」という悲しい気持ちになりました。しかし、その恩師は、そう言って半年もしないうちに演奏を再開し、過酷な練習を開始しました。ピアニストには、ピアノの練習や音楽的な研究をすることが自分と一体になってしまっていて、それをやめることは、自分自身も無くしてしまうような気持ちになるのだと思います。恩師が演奏を再開したと聞いた時、心の底からほっとしました。

私も、恩師の退官の時の年齢にだいぶ近づいてきました。人生のほとんどすべてをピアノとともに過ごし、たくさん経験を今の若い学生たちに伝え、音楽の伝統とすばらしさを語り合えることは、たいへん幸せなことです。学生が今、悩んでいることも自分の若き学生時代のことからアドバイスできますし、練習の方法も自らが長い時間をかけて合理的な勉強の仕方を学んできたことを伝えられます。一日一日を音楽とともに生きてきたことの積み重ねが、視野を広げ、感性を養っているように思います。ピアニストは、舞台では華やかで華麗な演奏を披露しますが、その裏で、過酷な練習が一生続きます。